



『江戸時代の設計者 異能の武将藤堂高虎』

〈講談社 2006.3〉
〔所在〕図・展示棚
〔請求記号〕289.1/F 67

藤田 達生 先生
教育学部教授

皆さんが通っているこの三重大がある「津市」の基礎を作った人が誰だか知っていますか？それが今回の主役、藤堂高虎です。この藤堂高虎が津に来てから今年でちょうど400年。市内では各種イベントも行われていますし、新聞やテレビなど様々なメディアなどでも高虎について取り上げられています。今回はその高虎研究の第1人者である藤田先生にお話を伺いました。

津市と藤堂高虎の関わりについて

藤堂高虎の津入府から今年で400年ということで様々なイベントが企画されています。でも藤堂高虎が誰か知らない新入生の方も見えるかもしれませんので、高虎と津の関係についてお教えいただけますか？
藤堂高虎は、ちょうど400年前に伊予今治（今の愛媛県今治市）から津に転封（転勤）してきました。彼は津の基盤を整備した人で、津城や上野城（伊賀市）なども彼の手によるものです。高虎は津に新しいタイプの城下町、つまり「人工都市」を作り上げました。埋め立てや造成などを大規模に行い、武家地・町人地・寺町などのゾーンを作って現在の津市の街区の基礎を確定しました。特に伊勢街道・伊勢別街道・伊賀街道を城下町に引き込み、津に諸国から参宮客をはじめとする様々な人と物が集中するように工夫したことが重要です。それによって、津は東海地域において名古屋に次ぐ中核都市へと成長したのです。

藤堂高虎とはどんな人物

藤堂高虎については「世渡り上手」などというようなイメージが定着している感がありますが、

先生はどのような人物だと思われますか？

非常に魅力的な人物ですね。当時の武将にとつて自分の才能を認めてくれる主君を選ぶことは常識です。昔のことは、まずその当時の価値観で判断する必要があります。「世渡り上手」というのは、高虎に関係する基礎研究もなかった時期の、司馬遼太郎の小説に描かれた高虎像にすぎないのです。高虎は、秀吉の天下統一戦や朝鮮侵略などの最前線で戦いましたから、この国のいく末を考えざるをえない立場にありました。そのなかで秀吉政治の限界を悟り、新しい国づくりを家康のもとでおこなった。家康が天下を取ったのは、一般的には三河時代からの側近の働きによるものだとされていますが、敵対する豊臣方の有力大名と連携する必要があります。高虎はその橋渡し役を果たしたのです。

歴史上の人物を語る上で重要なことは

―― 武将と聞くとどうしても「戦う人」というイメージですが、藤堂高虎は「政治家」「治世者」というイメージも湧かせてくれますね

高虎は戦争の最前線に立つことで、信長以来の国家の中央集権化に限界を感じたと考えます。そこで、高虎は新しい国づくりのために、分権国家「藩」を構想し、それを自らが率先して誕生させたのです。教科書にも「藩」はよく出てきますが、これは幕府の法令によって作ったものではありません。高虎の生きた時代は、長い戦乱によつて疲弊した地域社会が、復興・活性化することが最大の課題でした。諸大名は、地域社会を安定的に治める必要があったのです。まさに猛将から治世者への転換の時代といえるでしょう。そのなかでも、藤堂藩は早く成功したケースといつてよいのです。私は、高虎を通して幕藩体制成立期について研究をさらに深めてゆきたいと思っています。

先生のご専門について教えてください

研究をはじめた頃は、室町時代から戦国時代にかけての民衆に興味を持っていた。一揆、惣村（自治村落）について研究していました。しかし、ただ民衆の力量だけを見つめていても歴史を語れません。国家や権力についても見ておかなければ、トータルな研究はできないと考えました。三重大大学に赴任した16年ほど前から、戦国大名や織田・豊臣政権について本格的に研究を始めたのです。やはり信長や秀吉を生んだ東海地域に来たことが、きっかけとなりました。目下ところは、江戸時代の初期に才能を発揮した為政者、この本の場合は藤堂高虎を通して、幕藩体制の成立過程について研究しています。

学生さんへのメッセージ

―― 学生の皆さんにメッセージをお願いします

この世の中には、絶対的なものはありません。ものごとは全て相対的です。皆さんには、通説・常識を批判的に見ていただきたい。つまり「批判力」を身につけてほしいですね。高校までは、必ず答えのある絶対的な価値観に支配されていたと思います。大学生活を通じてものごとを多面的に理解する訓練を重ねてほしいと願っています。

貴重なお話ありがとうございました



これだけは読んでおきたい

READING * LIST

各学部の先生からのオススメ本

共通教育 高山進先生

西田正規 著
『人類史のなかの定住革命』

講談社学術文庫
〔所在〕図・開架・PB
〔請求記号〕389/N81



西田は「生態学のレベルに下りて行く人類史」の立場から、人類史の画期を、定説となっている「農耕」の誕生にではなく、氷河期明けの「定住」に求める。氷河期が約1万年前に開け、農耕よりも早く始まった定住化の過程は、「人間の肉体的、心理的、社会的能力や行動様式のすべてを再編成した革命的なできごと」だという。「定住」以前の生活様式は、哺乳類6500万年の伝統を持つ「遊動」であり、通説を根底から覆す論理展開が小気味よい。

生物資源学部 田口 寛先生

吉川 暉 編
『新エネルギー最前線』

化学同人
〔所在〕図・開架・図書
〔請求記号〕501.6/sh62



あと数十年もすると、世界中の原油が枯渇し、このままでは大変なことになるとのことで、新エネルギーの開発が盛んになってきた。ただし、原油が枯渇すれば、ガソリン車は全く動かせないが、原油は世界の全エネルギー需要のおよそ1/3に貢献している程度である。今や、あちこちで風力発電の風車が回り、クリーンエネルギーかも知れないが景観を損なうとか、なんであれが1基1億円以上もして、強風ではお手上げなんだとかのクレームを言われ、またバイオエタノールは、初期段階ですら、すでに食料穀物やその加工品の価格が連鎖的にかなり値上がりし、日常生活にも大きな影響を与えはめている。といった、今後のエネルギーは、大所高所に長期展望するとうなるのかの示唆を与えてくれるのかこの本である。

工学部 林 照幸先生

石井茂 著
『量子コンピュータへの誘い』

日経BP社
〔所在〕図・開架・図書
〔請求記号〕007.1/I75



量子コンピュータとは何だろう、面白そうだけど難しそうだ。このように感じている方も多いのではないだろうか。本書は一般的な常識だけで量子コンピュータを理解できるようにという目的をもって書かれている。20世紀に生まれた「量子」と「コンピュータ」という2つの発見・発明が21世紀に向けてどのように結びついていくのかが豊富な話題とともに解説されており、大変読みやすく興味深い本である。ぜひ一読されたい。

医学部 清水房枝先生

スペンサー・ジョンソン 著/
門田美鈴 訳
『チーズはどこへ消えた?』

扶桑社
〔所在〕図・開架・図書
〔請求記号〕933/J64



21世紀に入り、350万人が読んだ国民的ベストセラーと言われた本「チーズはどこへ消えた?」は、あらためて自分を見なおし、前向きに生きることをキャッチフレーズにしている。2匹と2人は、迷路の中に住みチーズを探す。「チーズ」は私達が人生で求めるものであり(仕事・健康・財産・精神的安定など)、急激な社会状況の変化に、迷路(チーズが追い求める場所)で、いかに対応すべきか考える機会をくれます。

教育学部 山口泰弘先生

陰里鉄郎 著
『陰里鉄郎著作集 日本近代美術史研究と美術館・研究所・大学』

一州堂
〔所在〕図・開架・図書
〔請求記号〕704/Ka 18/1-3



東京国立文化財研究所研究員、三重県立美術館館長、横浜美術館館長、名古屋芸術大学教授などを歴任した著者が、その多彩な経歴に裏打ちされた多様な視点から日本近代美術を捉え、平易に論じた美術評論集である。「近世洋風画から日本の印象派へ」「大正期を中心に」「昭和から現代へ」の3冊から成る。分断された時代として捉えられがちな近世を、近代とひとつづきの地平として一望する広い視野を特徴的としている。

人文学部 青木雅生先生

夏目漱石 著
『私の個人主義』

講談社学術文庫 ほか
〔所在〕図・開架・図書
〔請求記号〕PB914.6/N58



夏目漱石の講演録である。企業や経済において「グローバル化」が言われているが、明治維新においても西洋文明の吸収の仕方が自分たちの信念から良いと評価しているのではなく、彼の国でよいからよい、ということになっている。それは結局「他人本位」でしかなく、自己のしっかりしたものを持っている「自己本位」な自分を立てる「個人主義」とはいえない状態にある。それは「利己主義」のような自分勝手とは別物であるという。今の自分たちを見直す示唆に富んでいると思う。